

はアメリカも中国もインドもまだまだ人口が増加する国々です。またIT業界の強みは海外市場に出やすいことです。それは同時に海外からライバルが入ってきやすいという事でもあります。このためIT業界ほど英語を必要とする業界は他にないので、英語での面接もこの本に含めました。

英語は道具です。道具は使い慣れれば「鬼に金棒」のようにあなたの味方となります。アメリカのシリコン・バレーでITエンジニアを20年以上続けてきた筆者が、あなたに英語という道具の練習方法をお伝えします。学校の成績は関係ありません。日本語ができる人は英語も必ずできるようになります。でもそのためには毎日の練習が大切です。言葉は勉強するものではなく練習するものです。体で覚えるサッカーのようなものです。今から練習しておけば、上司や同僚や部下がいつ外国人になっても大丈夫です。

英語に国際的な標準語はありません。発音について言えばイギリス英語にはイギリス訛があり、アメリカ英語にはアメリカ訛があります。同じくオーストラリア英語にはオーストラリア訛があって、インド英語にはインド訛があります。日本人が話す英語は当然日本語訛があるので、それに臆することはありません。どの訛でもいいから、意思の疎通ができれば

あなたの英語は道具として十分な価値があります。筆者はアメリカ英語しか知りませんので、この本にあるのはアメリカ英語の例です。

英語で仕事することは思ったより簡単です。知らない事があれば堂々と「I don't know」と言ってかまいません。特にアメリカ人には人に訊くことが恥という発想がないので、知らなければ知っている人に訊けばいいし、分かっている人なら知らない人にも分かりやすく説明できるはずだという期待があります。何事も話さなければ分からないというのは一見不便なようでも、それまで曖昧にされていた前提をひとつひとつ確認する必要があるので、結果的に仕事に役立ちます。幸いITの世界で使われる英語は比較的簡単ですし、そこで使われている文法も中学で習ったものばかりです。英語という道具を使って仕事をする楽しさを経験し、活躍できる世界を広げましょう。